堀辰雄『ふるさとびと』におけるシュティフター受容研究

――『深林』を通して――

宮田愛美

序章

作家、堀辰雄の代表作には『風立ちぬ』や『菜穂子』といった小説が挙げられ、自身も日記に「我々は《ロマン》を書カナケレバナラヌ」と記すほど小説の創作にこだわっていた。堀辰雄の最後の小説は一九四三年一月に雑誌「新潮」で発表された『ふるさとびと』だった。『ふるさとびと』は『楡の家』、『菜穂子』とまとめて『菜穂子』三部作とも称される。『菜穂子』は代表作として数えられるほどの作品であるため先行研究も充実しているが、『ふるさとびと』の先行研究は『菜穂子』と比べると少なく、充分とはいえない。そこで、『ふるさとびと』を軸とした作品研究を行うことを本論文の第一の目的とする。

第二の目的は、外国文学の受容である。辰雄は様々な外国文学に親しんだが、中でも大きな影響を与えた作家としてプルーストやリルケが挙げられる。外国文学からの受容をテーマとした先行研究では、この二人からの影響について述べられたものが目立っている。実際、辰雄の残したノートでも二人に関する記述は突出している。ただ、辰雄がこの二人のほかにも多くの外国の作家の作品を翻訳し、影響を受けていたことを忘れてはならない。特に私が注目するのがオーストリアの作家、アーダベルト・シュティフター（一八〇五～一八六八）である。シュティフターは前の二人のように辰雄によって作品を翻訳されたことや、ノートで詳しく分析されているようなことはないが、随筆『匈奴の森など』のなかでその魅力を語られた上、蔵書にも作品が数点含まれている。しかし、今のところシュティフターから辰雄に与えられた影響を研究した論文は見当たらない。よって、辰雄のシュティフター受容をこの論文の第二の目的とする。

辰雄が初めて触れたシュティフター作品は『Der Hochwald』であり、小品『匈奴の森など』ではその作品の魅力が語られている。この作品は『ふるさとびと』との共通点がいくつも認められる。また、『ふるさとびと』を外国文学の受容から解釈した研究は少ない。つまり、『Der Hochwald』と比較することによって『ふるさとびと』は新たな一面を見せると考えられる。それは結果としてシュティフターからの辰雄への影響関係も見ることにもつながるだろう。したがって、『ふるさとびと』と『Der Hochwald』の比較研究を通し、第一、第二の目的を達成したい。

そのために第一章では辰雄とシュティフターのつながりを確認し、第二章で二人の作品『ふるさとびと』と『Der Hochwald』を紹介する。そして第三章でその二つの作品の比較研究を行い、終章で結果をまとめたい。

第一章　辰雄とシュティフター

第一節　辰雄とシュティフターの接点

シュティフターはオーストリアの作家であり、『水晶』や『晩夏』、『ヴィーティコー』といった作品が代表作として挙げられる。シュティフターの日本受容は小名木栄三郎『日本におけるシュティフターの受容』によると旧制高等学校におけるドイツ語の授業をはじまりとしている。

辰雄のシュティフターとの出会いも、やはり旧制高等学校での授業だった。辰雄とシュティフターの接点は教科書だけでなく雑誌、蔵書においてもみられる。そこで、次節からは辰雄とシュティフターのつながりを具体的に捉えてきたい。

第二節　教科書

第一に教科書からの影響である。辰雄は一高理科乙類時代にシュティフターの作品を授業で講読したことを、一九三五年雑誌「新潮」の一月号に掲載された小品『匈奴の森など』で回想している。

私は高等学校時代に教科書として讀んだことのある「番木林（ホッホワルド）」といふ物語のことを始終思ひ浮べるやうになりました。この物語を書いた作家は確かアダルベルト・シュティフテルとか云ひました。（略）実はかういふ私もその物語の筋などはすつかり忘れてしまつてゐるのですが、唯、その雰囲気のやうなものだけははつきりと頭に残つてゐるのです。（一体、小説なんていふものはその雰囲気だけが真実なのではないでせうか？）（略）私がそれを教科書として読されたときは、丁度、今の自分にはどうしても理解できないやうな焦燥が自分を人生の方へ驅りやつてゐた頃だつたので、そんな地味な物語からは何の感動も受けませんでした。

（傍線部：筆者）

このように、辰雄が初めて読んだシュティフター作品は『番木林』、ドイツ語でいうところの『Der Hochwald』だった。若き辰雄にはこの作品は地味を捉えられ、彼の文学観に影響を及ぼすことはなかったようだ。一方、その地味な作品の雰囲気が卒業して十年ほど経った現在でもはっきり思い出すことができるというのである。また、小説にとって最も大切なものは雰囲気ではないかとも述べている。小説として重要な部分を確実に印象付けているという点で、『Der Hochwald』が評価されているといえよう。

さらに、簡単にあらすじを書き出した後で辰雄は左記のように述べている。

今になつて、私は始めて何とも云へない懐しい気もちで、それを。読んだ漠然とした記憶を蘇らせてゐます。さうして私は、大戦当時のこの「匈奴の森」を背景にして、ドイツ人たちが絶えず何かに怯やかされながら暮らしてゐるところを、――しかし最後まで何の出來事らしいものを起らせずに、たださう云つた不安な雰囲気

のやうなものだけで、そしてその間におのづから一人一人の性格が浮び出てくるやうな風に、一つの小説を書いて見たいとも思つてゐます。……　（傍線部：筆者）

一高時代にはなんの感慨も抱かなかった作品を懐かしく思い、小説の参考にしたいとまで述べている。衝撃を与える出会いにこそならなかったものの、時を経てシュティフターは辰雄に文学的影響をもたらしたのだ。

その授業の様子についてより詳しく描かれた作品が、一九四二年雑誌「向陵時報」に発表された『二三の追憶』である。この作品では辰雄が『Der Hochwald』を三年の講読の授業で習ったことなどが記されている。

「ホッホワルド」は何処から何処まで深い森の中の物語であり、すべての人々や出来事が森の静寂のなかに溶けこみ、ひとり先生のしはがれた声のみがその静寂を破つて、流れ来り流れ去る渓流の音と入りまじりながら、森の主めいて聞えてきてならないこともあつた。　（傍線部：筆者）

『二三の追憶』は、作品よりも先生との思い出の色の方が強い。一方右のように静かな森の物語がひそかに辰雄の心に溶け込んだことも確認出来る。

第三節　雑誌

第二には雑誌についてである。辰雄が編集同人の一人として参加していた雑誌「高原」では、山室静がシュティフターを紹介する連載をしていた。山室は前掲の小名木栄三郎『日本におけるシュティフターの受容』で「日本におけるシュティフターの紹介・翻訳で大きな功績をあげた一人に、北欧文学者として知られ、詩人・評論家としても著名な山室静氏がいた」、「このような詩人への理解と普及に努めたこれらの業績は、いずれもシュティフター文学に寄せるこの詩人評論家の誠実な愛に基づいていることは明らかである。」と、日本のシュティフター受容への業績をたたえられている。

『堀辰雄全集　別巻二』に収録されている『雑誌「高原」のことなど』において山室は雑誌名が辰雄の意向で決まったと述べている。『堀辰雄全集第八巻』に収録されている山室宛の封書にも、

御端書拝見、この頃すこし身体の工合が悪くて九日の会には残念ながら出席できません　雑誌の名は「高原」ぐらゐのところが矢張り好いでせう　なるべく何んでもないやうな名にしておいた方があとできつと好くなります　顧問なんといふ四角ばつたものは止して、みんな一しよに同人としてやつて行きませう（これはぜひさうして貰はなければ、僕はいやです）なほ気のついたことがあつたら、橋本君にお話ししておきます　（傍線部：筆者）

と書かれている。また『雑誌「高原」のことなど』では、辰雄がこの雑誌のためによく便宜を図っていたことがわかる。

とにかく堀さんは心から協力して、創刊号にはリルケの『旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌』の全訳を寄せたり、いろいろ執

筆者を紹介して下さったほかに、中村真一郎君の『死の蔭の下に』や野村英夫君や福永武彦君の短篇を推薦して、その紹介を同人雑誌にも書いて下さった。

山室がシュティフターの評伝を連載したのは一九四八年に発行された第七号、第八号であり、この頃には辰雄は病床に就き作品を掲載することはおろか紹介文を書くことも出来なくなっていた。

しかし、辰雄は雑誌名以外にも「高原」に求めているものがあった。それは再び『雑誌「高原」のことなど』から抜き出すと「雑誌はできるだけ特定の立場に片寄らぬものにしてほしい」ということである。山室は同作品で、「私の過去の思想的立場や、当時私が国民高等学校風のものの設立に奔走していたため、それと雑誌があまりに密着して地方主義的片寄りを見せはしまいかと心配されたためであったろうと思う。」と、その言葉の意味を受け止めている。結果として「高原」は文学、文化ともに充実した雑誌となった。以上のように、辰雄は「高原」の方針を決めるにあたり重要な役割を果たしたといえる。そして、『信濃追分の今昔をきく―歴史と文学―』ではこう証言されている。

ただし、文学のことになると厳しかった。ということは、『高原』という雑誌を山室君や片山さんがやっていて、こちらは堀さんを主にして、私は堀さんの代理みたいで編集会議なんかに出てたわけですけれど、そのときに、堀さんが私によこした手紙があるんです。(略)それは厳しいもので、自分の名前が出てる雑誌―編集者として名前が出てる雑誌に、こういう作家には書かせてはいかんていうものでしてね。

(傍線部：筆者)

傍線部に見られるような辰雄の厳しい審査を通り「高原」に掲載されたということは、シュティフターの評伝がその価値を認められたと捉えられる。

第四節　蔵書

第三に蔵書におけるシュティフター受容である。辰雄の蔵書は国内外、ジャンル問わず膨大だが、その中にはシュティフターの作品も含まれている。辰雄の蔵書の中に、シュティフターの著作は全部で七点含まれている。左はその七点の内訳である。

①AdalbertStifter『Brigitta: eineErzählung』(Insel, [n.d.])
②AdalbertStifter『Heidedorf』(Nankodo、一九三九年)
③AdalbertStifter『Der Hochwald: eineErzählung』(Insel、[n.d.])
④AdalbertStifter『Der Hochwald』(Musarion、一九二〇年)
⑤シュティフター・アーダルベルト著、山室静訳『森の小径』(青磁社、一九四七年七月)
⑥シュティフテル・アダルベルト著、小島貞介訳『深林』(弘文堂書房、一九四〇年一月)
⑦シュティフテル・アダルベルト著、宇多五郎訳『晩夏　第一部』(櫻井書店、一九四八年九月)

本文の言語に注目すると①～④の四点はドイツ語で書かれた原著であり、⑤～⑦の三点は日本語に翻訳されたものである。現在①～④は

神奈川県の神奈川近代文学館に、⑤～⑦は長野県にある堀辰雄文学記念館に収蔵されている。

私は去る二〇一二年十一月十七日、神奈川近代文学館に赴きこの四点の蔵書を調査した。その結果をここに報告する。

①は書き込みや下線が多く確認できたが、辰雄による書き込みかは判別出来なかった。

②は編者による序文やシュティフターの肖像画が掲載されているもので、東京の南江堂から発行されている。保存状態から古本ではない可能性がある。ごく薄く数字の書き込みがあるが、何を意図したものかはわからなかった。

③は書き込みこそなかったが、「随筆」と書かれた紙片としおりが挟み込まれていた。見返しに「MITSUKOSHI.LTD BOOK DEPARTMENT TOKYO.JAPAN 趣」と読めるシールが貼ってあり、三越で購入したものと考えられる。

④はこの中で唯一挿絵のある本だった。他のものと比べて全体的に汚れが目立ち、古本ではないかと思われた。見返しに「書肆 上田得三東京 本郷 根津八重垣町」と読める判が押してあることから、東京で購入した可能性が高い。この本は百二～百三ページにあたるページが落丁してしまっていた。

堀辰雄文学記念館は軽井沢町役場の Web ページの堀辰雄文学記念館のページで蔵書目録を確認することができる。⑤は第三節で登場した山室からの署名本である。書き込みや挟み込みに関しては二〇一二年十二月十九日に改めて堀辰雄文学記念館に連絡を取ったが、⑤、⑥、⑦ともにないことを二〇一二年十二月二十一日の返答より確認された。

以上のように、蔵書に重大な書き込みは見当たらなかった。しかし、七点のうち三点は『Der Hochwald』であることがわかった。一冊落丁のものが含まれているとはいえ、辰雄のシュティフター作品への関心が特に『喬木林』に向いていたことが示されている。

第五節　まとめ

第一章は、第一節で辰雄とシュティフターの接点を挙げ、第二、三、四節でそのつながりを紐解いた。そこで気になるのが、第二節で挙げた『匈奴の森など』の記述である。

> 老人と女達だけで、気づかはしげに暮らしてゐる。……ただ、そんな恐怖と不安とに充ちた、毎日毎日の繰り返しが、綿々と語られてゐただけのやうでした。そしてなんの劇的な場面も遂に現はれずに、物語の始まつたのと同じやうな、無気味なほどの静けさで物語は終るのでした。
> 大戦当時のこの「匈奴の森」を背景にして、ドイツ人たちが絶えず何かに怯やかされながら暮らしてゐるところを、――しかし最後まで何の出来事らしいものを起らせずに、たださう云つた不安な雰囲気のやうなものだけで、そしてその間におのづから一人一人の性格が浮び出てくるやうな風に、一つの小説を書いて見たいとも思つてゐます。……
>
> （傍線部：筆者）

この記述から、老人や女性で寒村に暮らし、娘が事故にあい、家同士の問題に巻き込まれながらも特にどの問題も解決することなく話が閉じる『ふるさとびと』が思い起こされないだろうか。

次章からの『Der Hochwald』と『ふるさとびと』の比較研究を通し、『Der Hochwald』が『ふるさとびと』においてどのように受容されているか調べていきたい。

第二章　『深林』と『ふるさとびと』

第一節　『深林』

『ふるさとびと』を『Der Hochwald』と比較するにあたり、この二つの小説の基礎情報を述べていきたい。この章から使用するテキストに準じて『Der Hochwald』を『深林』と表記する。

『深林』は一八四二年、雑誌「イリス」に発表された。主要な登場人物は主人公の美しい姉妹、クラリッサとヨハナ、二人の父であるハインリッヒ・ヴィッティングハウゼン男爵、兄のフェリックス、猟人グレゴール、スウェーデンの王子ロナルド、騎士のブルーノーである。あらすじは資料編に掲載している。

作品で描かれる戦争とは三十年戦争のことである。舞台もシュティフターの故郷、ボヘミアであり、実在の土地や出来事をモチーフにしている点で『ふるさとびと』と共通している。辰雄の「何処から何処まで深い森の中の物語であり、すべての人々や出来事が森の静寂のなかに溶けこみ」という言葉はボヘミアの森を舞台としたこの作品の雰囲気をよく言い表わしている。

ここで、『匈奴の森など』で辰雄が『深林』の簡単なあらすじを述べている点に注目したい。その内容が雑誌「新潮」に掲載されたものと、後に単行本に収録されたものとで変化しているからである。以下に雑誌掲載時と単行本収録時のあらすじを並べる。

……なんでも普仏戦争かなんかを背景にした物語で、ドイツの山岳地方にある大きな森のなかの城で、をりをり遠くに銃声などを聞きながら、女たちだけで、出征中の夫や息子の身の上を案じながら、気づか〈は〉しさうに暮らしてゐる。　（傍線部：筆者）

それはなんでもスウエデン戦争を背景にした物語で、ボヘミアの山岳地方にある大きな森のなかの城で、ときをり遠くに銃聲などを聞きながら、老人と女達だけで、氣づかはしげに暮らしてゐる。

（傍線部：筆者）

右が雑誌「新潮」に発表された文章であり、左が単行本『堀辰雄小品集・絵はがき』に収められた文章である。まず、雑誌版では作品の背景となっている戦争が普仏戦争からスウェーデン戦争に訂正されている。普仏戦争は一八七〇年から七一年、三十年戦争は一六一八年から四八年なので、ここを間違えると時代が大きく異なってしまう。加えて、普仏戦争はプロイセンとフランスの戦争であり、スウェーデンは参戦していない。これではスウェーデン王の息子、ロナルドがスウェーデン軍の侵攻を止めに行くという筋が当てはまらない。また、雑誌版ではドイツの山岳地方となっていたのが単行本版ではボヘミアに直され、より詳しくなっている。雑誌版で「女たちだけ」となっていた記述も、単行本版ではグレゴールを指すと思われる「老人」という単語が追加されている。さらに「出征中の夫や息子の身の上を案じなが ら」という決定的に誤った一文が、単行本版では削除されている。ク

ラリッサもヨハナも生涯独身だったので、夫や息子が作中に出てくることはない。

このように雑誌版と単行本版を比べると、単行本に収めるにあたってあらすじがより正確なものに加筆・修正されたことがわかる。『ふるさとびと』が雑誌に掲載された年は一九三五年、『堀辰雄小品集・絵はがき』の発行は一九四六年であることから、第一章の第四節で触れた蔵書をこの間に読み直した可能性が考えられる。そして、『ふるさとびと』はちょうどこの期間に発表されている。

第二節　『ふるさとびと』

『ふるさとびと』は一九四三年一月に雑誌「新潮」で発表され、この時は「―或素描―」という傍題がついていた。辰雄の愛した追分を舞台としたこの作品の主な登場人物には、主人公のおえふ、娘の初枝、父の草平、母、弟の五郎、五郎の妻のおしげ、手伝いの捨吉、学生の松平が挙げられる。『楡の家』、『菜穂子』の登場人物である三村夫人、菜穂子、森も少し登場する。こちらもあらすじを資料編に掲載した。

『ふるさとびと』の舞台となる牡丹屋は辰雄が懇意にしていた追分の油屋旅館だと考えられている。『信濃追分の今昔をきく―歴史と文学―』第七章の「堀辰雄回想――堀多恵夫人にきく」で、おえふさんのモデルは旅館の娘の小川おつやであり、五郎はおつやの弟で追分油屋旅館の主人となった誠一郎といわれている。牡丹屋自体も追分油屋がモデルとなっている。第五章「油屋のこと、追分の思い出――小出かつさんにきく」を読むと実際に本家の軽井沢の油屋と追分の油屋があり、経済的な問題も起こったことがわかる。一方前掲の書に掲載されている小川家の家系図には初枝にあたる子供は見当たらず、どれも事実だということではない。『信濃追分の今昔をきく―歴史と文学―』の聞き手を務めた後藤明生は次のように述べている。

> 堀さんの小説っていうのは、確かに『ふるさとびと』なんかね、モデルのようなものはわりあいはっきりしてるんですね。ただ、事実とフィクションの境目が、実に微妙なんですね。（略）実に微妙な一線がある。全くの架空のことじゃないんですね、話しは。大体場所もはっきりしてますしね、人物その他関係も。現実の一つのモデルっていうか、そういうものを文体でうまく手ごろにしていくっていいますかね、くずしていって、それで別なものをつくっている。

右では辰雄はモデルとなったものをありのまま書くのではなく、文体などで一旦崩し、別のものを構築し直していると述べている。つまり辰雄の作品は事実をそのまま描いたものではなく、それらを再構成して創り出した別の世界だといえる。

雑誌掲載時に傍題で「―或素描―」とあるように、この作品はさらに精巧なものとなるかもしれなかった。『楡の家・菜穂子・ふるさとびと・のノート』では、辰雄が『ふるさとびと』創作の意図について語っている。

> 「ふるさとびと」は、それらの作品とあるつながりをもたせつつ、一人の田舎の女性を描こうとして、これも長いこと考えていたものだが、ついにその素描のようなものしかできなかった。

（傍線部：筆者）

『ふるさとびと』は長い期間にわたり構想を練られていたが、発表されたものはその素描に留まってしまったというのだ。これは一九三六年十一月二十二日に師である室生犀星へ出された手紙に「追分のやうな村の女を牧歌のやうに書いても見たいし」と書かれていることから裏づけられる。さらに、この文章は次のように続くのである。

しかし、いまでもまだ、それを一幅の精密なタブローに仕上げたいという欲求は私から去らずにいる。（傍線部：筆者）

辰雄には『ふるさとびと』を素描ではなく完成品に仕上げる意志があったということだ。それほど『ふるさとびと』は辰雄の創作意欲を刺激する作品だったに違いない。

そして、「『ふるさとびと』は、それらの作品とあるつながりをもたせつつ、一人の田舎の女性を描こうとして」という言葉から、『楡の家』・『菜穂子』と関連性を持たせているが、『ふるさとびと』は「一人の田舎の女を描く」という独自の主題を持つ作品であることもわかる。このことからも、『ふるさとびと』は『菜穂子』の補遺と留めるには惜しい作品だと感じられる。舞台、人物をともにする作品なので関連性に注目するのは当然だが、『ふるさとびと』を主体とした作品研究の必要性がある。

第三章　比較研究

第一節　比較する要素

『ふるさとびと』と『深林』を比較する鍵は、やはり『匈奴の森など』のこの一文にある。

さうして私は、大戦当時のこの「匈奴の森」を背景にして、ドイツ人たちが絶えず何かに怯やかされながら暮らしてゐるところを、――しかし最後まで何の出來事らしいものを起らせずに、たださうした不安な雰囲気のやうなものだけで、そしてその間におのづから一人一人の性格が浮び出てくるやうな風に、一つの小説を書いて見たいとも思つてゐます。……（傍線部：筆者）

辰雄が『深林』から影響を受け書きたいと思った小説は、ここに集約されているのである。そこで、この文を傍線の引いたいくつかの要素に切り分け、その要素において『ふるさとびと』と『深林』の二作品を比較にし、どのような受容がなされているかを明らかにする。

まず、「ドイツ人たち」はこれより前のあらすじを語る文章で「老人と女達」と具体的に指されている。「老人と女達」はクラリッサ・ヨハナ・グレゴールのことである。これをさらに「女性」と「男性」の二つの要素に分ける。次に「大戦当時のこの『匈奴の森』を背景にして」の部分を舞台の設定ととる。二つの作品の舞台の設定として共通しているのはどちらも実在の土地であることである。この要素を「風土」と名付ける。そして「暮らしてゐる」はつまり生きていることなので「死生観」という要素とする。また、人が暮らす際には家が必要になるが、二作品に共通する重要な建物として「廃墟」が挙げられるため、

これも要素に加える。

したがって、次節からは『ふるさとびと』と『深林』を「女性」、「男性」、「風土」、「死生観」、「廃墟」の五つの要素でもって比較し、『ふるさとびと』が『深林』から何を受容しているのかを明らかにする。

第二節　女性

『ふるさとびと』と『深林』は、どちらも主人公が女性である。前者はおえふという牡丹屋の娘、後者はクラリッサとヨハナの姉妹である。この三人は国籍や年齢は異なっているが、美人という共通点がある。ハンナは「破格風で小さな綺麗な頭が浮いてゐる」、クラリッサも「麗しくも才長けたその顔」と、初めて登場した場面でその美しさを形容されている。一方のおえふ「年よりもずつと若く見せてゐるおえふの美貌は、学生たちの間に、何かと噂の種を播いてゐた。」、「不思議にいつまでも若く美しかつた。」と記されている。

そして、『ふるさとびと』には容貌の美しい女性がもう一人存在する。それは、おえふの娘の初枝である。初枝の容姿については「大きい眼をもつと描写されている。また世界観のつながった作品である『菜穂子』を開いてみれば、「初枝は、母親似の、細面の美しい顔立をし」とその器量の良さがさらに判然とする。

この二組の女性たちは、そのほかにも共通点がある。例えば、『深林』ではクラリッサがロナルドと再会し、思いが通じ合うと、ヨハナ亡き母に変わって慕っていた姉に溝を感じるようになる。恋が寄り添って生きてきた二人に隙間をつくったといえる。一方『ふるさとびと』では、二章でおえふの許に東京から手紙が届く。この手紙の主について作中で詳しく語られることはない。しかし『菜穂子』での描写を加味して考察すると、手紙の主はおえふと噂となった男だと推測される。おえふが初枝以外のこと、恐らく噂となった男からの手紙に気をとられていた一方で、初枝は一人で苦しんでいた。ここに二人の気持ちの相違が見られる。

次に、どちらの女性にも悲劇的な運命がふりかかっていくということも同様である。『深林』では父や兄、恋人が亡くなった上、住んでいた城も廃墟と化してしまう。そして『ふるさとびと』でも初枝の怪我や、父の死に端を欲した相続問題、弟の病気といった具合である。「絶えず何かに怯やかされながら」といえるほど災難に次々と遭っている上、どれも「最後まで何の出來事らしいものを起らせず」というように問題が解決することも決裂するところは、『深林』の影響に違いない。

最後に、二組とも共に生きることを選ぶことも共通している。父、兄、そして愛する人を失ったクラリッサが「ヨハナ、私の愛するのはあなたばかりよ、もうあなたばかりよ。…だからあなたも私を愛してね。」と訴えると、ヨハナもそれに答え、お互い独身のまま廃墟となった城で残りの人生を歩んだ。おえふもクラリッサのように、初枝のために生きる決心をする。「おえふはもうすべてを詮めた。初枝のために、自分のすべてを棄てようとした。」という一文にその決意が表れている。

このように「女性」という要素では、美しい女性という点やお互いへの思いに差異が生じる点、いくつもの悲劇に見舞われる点、それでも二人で生きていく決心をするという点が影響されている。

第三節　男性

『深林』に登場する男性では、グレゴールやヴィッティングハウゼン男爵といった老年の男性の活躍が目立つ。グレゴールは優れた猟人であり、クラリッサとヨハナを守るという役目を果たす。男爵は二人の娘が危険に巻き込まれぬよう秘密裏に森の奥に家を建て、グレゴールに娘達を託すなど、的確な処置を行っている。このように、老年の男性は頼りがいのある人物として描かれ、姉妹や家を守る役割を果たしている。

この役割を、『ふるさとびと』ではおえふの父・草平が担っていると捉えられる。草平が責任感の強い、仕事もできる男性だということは次の描かれ方からわかる。

牡丹屋の主人がまだ稚い子を残して亡くなると、後見に頼まれて、瓦解以来何度も倒れさうになつてゐたその世帯を引き受けることになつた。(略)預つてゐる牡丹屋をみすみすその儘仆れるのにまかせてゐるときではないと思つた。そこで自分の一存で、隣村の原野のまんなかに出来た停車場の前へ、率先して、牡丹屋の裏にあつた厩舎をそつくりそのまま移した。(略)それが見事に当あたつて、牡丹屋は徐々に立ちなほり出した。　(傍線部：筆者)

倒れそうだった家の後見人になり、独断で再起をかけた結果倒れるどころか経営を立て直すという、責任感や決断力、商才を感じさせるエピソードである。

また、この父の役割は、同時に次世代に伝承する役割でもあるようだ。グレゴールは森の伝説や知恵をクラリッサとヨハナに伝えた。草平も、「たまにはこの古駅を見にくる山好きの旅人などがあると、その客を相手に、若いころからの此の村の変りやうをさまざまに思ひ出し、夜のふけるのも知らぬやうに語りきかせてゐた。」とある。

したがって、「男性」という要素においては「女性」や家を守る役割と、次世代に伝承する役割が受容されている。

第四節　風土

辰雄が『二三の追憶』で「何処から何処まで深い森の中の物語であり、すべての人々や出来事が森の静寂のなかに溶けこ」んでいると評すように、『深林』は森に始まり森に終わる物語である。まずは、『深林』の初めの段落を抜粋する。

小国オーストリアの北境三〇哩にも渡つて森林がその薄色の帯を西へと曳いてゐる。それはタイア川の水源地に起つてボヘミアの国土がオーストリアとバヴァリアに境を接するあの境界結節点にまで及ぶ。昔この地点に、砿物結晶結成の際の針状体様に、巨大な尾根又尾根の一群が衝突して屈強な山巓を盛り上げた。この山巓は三つの国土から遥かの彼方にその水色の森をのぞかせ、波打つ丘陵地と水量豊かな渓流とを四方に送り出す。巓はこの種の山形によく見る様に山脈の走路を阻み、かうして山脈はここから北に折れて数日の行程に渡つて連つてゐる。

『深林』の冒頭はこのように延々と周囲の自然の説明が続いていく。そして物語の最後の二段落を抜き出しても、次のようにやはり森の様子を描写している。

西の方を無限の森林が拡がつて黙りこくつてゐる。このましい自然のままなことは、昔と変りない。グレゴールは森の家に火をつけ、その跡に森の種子を撒いたのであつた。森の草地に聳えてゐた楓、山手欅、蝦夷松その他の類は無数の子孫を持ち、あの場所一杯に繁つた、そしてあたりは再び深い処女林となつた曾ての様に、そして又今もそのままに残つてゐる様に。

一人の老翁が影の様に尚ほしばしば森を渡る姿が見かけられた、然しいつの頃までは居たか、いつの頃から居なくなつたか誰もその時を知らない。

『ふるさとびと』の書き出しも、周囲の景色を描いたものである。

『ふるさとびと』おえふがまだ二十かそこいらで、もう夫と離別し、幼児をひとりかかへて、生みの親たちと一しよに住むことになつた分去れの村は、その頃、みるかげもない寒村になつてゐた。

この後はさびれた追分についての文章が続き、「かすかに煙を立ててゐる火の山」も登場する。この火の山は、作品の最後の文章に繋がっている。左記は『ふるさとびと』の最後の段落である。

松平もそれきり黙つて、もうすつかり秋めいて近かぢかと見える火の山の火口のあたりに小さな雲がたえず移つてゐるのを見やついゐた。小さな雲がひとつづつ立ち去ると、そのあとに火の山の煙らしいものが一すぢ、かすかに立ちのぼつてゐた。

（傍線部：筆者）

辰雄はいつも舞台の説明を作品の導入としているわけではない。例えば『菜穂子』の冒頭は「『やつぱり菜穂子さんだ。』思はず都築明は立ち止りながら、ふり返つた。」で始まっている。したがって、『ふるさとびと』の構成も『深林』からの受容によると考えられる。

どちらの作品も森から森、山から山で作品を締めることによって作品の雰囲気をその中に閉じ込め、「すべての人々や出来事」を山あるいは「森の静寂のなかに溶けこ」ませているように感じられる。

そしてこの二作品は舞台を自然の描写のみではなく、その地に伝わる伝承も記すことで表現している。『深林』では、グレゴールが森で感じた不思議な体験、湖にまつわる伝説、祖母から聞いた話など、森にまつわる伝承が語られていく。『ふるさとびと』では、遊女の伝承が語られている。

昔、この村に古い狐が住んでゐて、それが人知れず毎晩のやうに数年まへ武家に殺害せられた或遊女の墓のほとりをさまよひ、ときどきそつとそれに近づいてはそれを弔めてやつてゐた。村びとがやつとその事を知つて、其処へいつてみると、その墓にもひとりでに深い傷ができてゐたのだつた……

『ふるさとびと』執筆中と思われる一九四二年十月二日に辰雄が軽井沢から書いた書簡には次のように書かれている。

午後はずつと小説の女主人公のことより、小説の背景になる古い村のことを考へてすごした、そこの遊女の墓や、馬頭観音や、養

蚕の家や、狐や、兎や何かのことなど。かういふことを考へ出すと、このあたりの風土記のやうなものがすぐに書けさうな気がしてくる

（傍線部：筆者）

「このあたりの風土記がすぐに書けそう」ということは、それだけ散策したのだろうと思われる。辰雄が軽井沢周辺をよく取材したと分かるものが書簡以外にもある。それが『軽井沢ノオト』である。ノートには植物から油屋の相続問題まで詳しく書き込まれている。辰雄がいかに軽井沢の、追分の風土に魅かれていたかを知る貴重な資料である。

「風土」の要素からは、作品の雰囲気を閉じ込める構成と、自然描写だけでない舞台の表現を受容したと捉えられる。

第五節　死生観

死によって悲劇的なできごとが起こる、あるいは悲劇的な死が訪れるため、『ふるさとびと』も『深林』も死とは切り離せない物語である。

『深林』の第七章では、父の男爵や兄のフェリックス、クラリッサの恋人ロナルドの悲劇的な死の顛末が語られる。そしてその場面では、「殆ど聞きとれぬ位の声が死の様に静かな暗い室内に綿々と流れた」、「丁度息絶える動物の最後の血汐の一滴の様に。」「彼女自身も死ぬ程の悲しみに落されてゐたが」（傍線部：筆者）と姉妹の悲しみに死という表現が多用される。とはいえこの表現は姉妹の死を本当に暗示するものではない。二人はその後も「永らく此処に住んだ」からである。けれど、余生を穏やかに暮らしたとは言えない。「終るどころか戦は幾年となく続けられ」たので、姉妹は「絶えず何かに怯やかされながら暮らして」いたといえる。しかし、クラリッサは一生ロナルドへの愛を胸に秘め「非常に長命を保つた」とある。

『ふるさとびと』でもおえふが「どうせ生きられても、ちやんとした身体になれない位なら、いつそ此の娘でも死んでくれたら……」、「一そのこと、その前にこの牡丹屋がひとりでにさうやつて崩壊して自分たちも一しよに死なれたらいい」と死を想う場面がある。五郎の病気のおかげで小康を得ている本家との問題が再燃すれば「自分たちを切か」される不安もある。そこで、おえふはその後どうしたのだろうか。

私は、おえふはその後も「何かに怯やかされながら暮らし」たと考える。第四節で取り上げたように、『ふるさとびと』は物語の冒頭と結びで「かすかに煙を立ててゐる火の山」が登場する。『堀辰雄事典』の山の項では、田上純子が山は死を意識しつつ生きる場所であり、『恢復期』から『風立ちぬ』や『菜穂子』まで山の認識は繋がっていると述べている。作中の時間が経過しても「火の山」が煙を立てている様子は、おえふがこれからも死を想いながら生きていくことを暗示していると捉えられる。

よって、「死生観」からは死を見つめながら生きることを改めてを認識させられたといえよう。

第六節　廃墟

クラリッサとヨハナが森の家から帰ってくると、居城の様子は変貌してしまっていた。その後屋根や部屋を整え直したが、「城の外観は相変らず廃墟であつた。幾年か来て幾年か去つた。城はいつも廃墟の様に見えた」というように、見た目は変わらなかった。さらに二〇〇年

後の城の様子が序盤で描写されている。

崩れ落ちた騎士の居城である。(略) フリードベルグの窓々はこの廃墟を西南に見る。(略) 城は太古の騎士の居城でその昔住んだ騎士の残忍故今魔法にかけられて暴風雨と日光に曝されながらも幾千年に互つて崩れ落ちることが出来ないのだと言ひ伝えてゐる。

(傍線部：筆者)

幾千年と建っているかのような表現が、城の荒廃を物語っている。谷口泰は『『喬木林』覚え書」において主人がいなくなってもなお聳え建つ「廃墟の悲劇的な美は運命に対する受け身の美」だとした。一方、『ふるさとびと』の舞台、追分の風景は『深林』の廃墟を思い起こさせる。

淺間根腰の宿場の一つとしての、瓦解前の繁栄にひきかへ、今は吹きさらしの原野の中に、いかにも宿場らしい造りの、大きな二階建の家が漸く三十戸ほど散在してゐるきりだった。しかもそのなかには半ば廃屋になりながら、まだ人の棲んでゐるのがあつたり、さすがにもう人が棲まずになり、やぶれた床の下を水だけがもとの儘せせらぎの音を立てて流れてゐるやうなものも混じつてゐた。

(傍線部：筆者)

『信濃追分の今昔をきく―歴史と文学―』で、辰雄の妻・多恵は次のように証言している。

昭和八年に来た時は、ほんの十日ぐらいでしたけれど、それからその次に来てだんだん追分の“自然”、風景に心をひかれ、街道筋のたたずまい、廃屋の並んだそういうものに非常に魅せられたんじゃないかなあという気はいたします。

(傍線部：筆者)

よって、辰雄は『深林』の廃墟の「運命に対する受け身の美」にも魅せられた可能性がある。

おえふがおきぬという名前で登場している『菜穂子』創作ノオトで、辰雄は『菜穂子』創作の契機となったモーリヤックの『テレーズ・デスケルー』の続編の序文から一節引用し、「彼等をおしつぶさうとする掟に対して彼等が否といはない力である。」と訳している。しかしこれに関して『堀辰雄事典』のモーリヤックの項で次のように述べられている。

正確な訳は「彼らが否という力」である。(略) 堀辰雄の作品の女主人公たちは何れも従順で否といわない。堀はモーリヤックから作中人物の生き方までは学ばなかったのである。

辰雄の志向する「否といはない力」、つまり「運命に対する受け身の美」は廃墟によって目覚めさせられたものかもしれない。

終章

本論文では、『ふるさとびと』の作品研究と辰雄におけるシュティフター受容を研究目的とし、それらを調べるためシュティフターの『Der

Hochwald』と辰雄の『ふるさとびと』の比較研究を行った。

第一章では辰雄とシュティフターの接点が教科書、雑誌、蔵書にあることを確認した。第二章では辰雄の『匈奴の森など』を雑誌掲載版と単行本収録版で比べ、『深林』に対する認識が単行本収録時には深くなっていることに気付いた。第三章では作品の比較を「女性」、「男性」、「風土」、「死生観」、「廃墟」の各要素に分けて行い、「女性」という要素では、美しい女性という点やお互いへの思いに差異が生じる点、悲劇にも見舞われる点、そして二人で生きていく決心をするという点を、「男性」という要素においては「女性」や家を守る役割と次世代に伝承する役割を、「風土」の要素からは作品の雰囲気を閉じ込める構成と、自然描写だけでない舞台の表現を、「死生観」からは死を見つめながら生きることを、「廃墟」からは「運命に対する受け身の美」を受容したと結論付けた。

第二章において、辰雄のモデルのある小説の創作の仕方を考察するにあたり次の言葉を引用した。

> 堀さんの小説っていうのは、確かに『ふるさとびと』なんかね、モデルのようなものはわりあいはっきりしてるんですね。ただ、事実とフィクションの境目が、実に微妙なんですね。(略)実に微妙な一線がある。全くの架空のことじゃないんですね、話しは。大体場所もはっきりしてますしね、人物その他関係も。現実の一つのモデルっていうか、そういうものを文体でうまく手ごろにしていくっていいますかね、くずしていって、それで別なものをつくっている。

この言葉は、『深林』の受容についても当てはめられるのではないだろうか。辰雄は自身でも筋よりも雰囲気の方が重要なのではないかと述べている。そして雰囲気というのは、その場や人をとりまく気分のことである。よって『ふるさとびと』は『深林』から各要素を受容し、その要素で追分を包むことによって雰囲気を再構築した作品だと結論づける。

〈参考文献〉

テキスト

堀辰雄『堀辰雄全集　第二巻』（筑摩書房、一九七七年八月）

アーダベルト・シュティフター著、小島貞介訳『深林』（弘文堂書房、一九四〇年一月）

一次資料

堀辰雄『堀辰雄全集　第三巻』（筑摩書房、一九七七年十一月）

堀辰雄『堀辰雄全集　第四巻』（筑摩書房、一九七八年一月）

堀辰雄『堀辰雄全集　第七巻（下）』（筑摩書房、一九八〇年六月）

堀辰雄『堀辰雄全集　第八巻』（筑摩書房、一九七八年八月）

二次資料

『堀辰雄全集　別巻二』（筑摩書房、一九八〇年一〇月）

小名木栄三郎「日本におけるシュティフターの受容」（「清和研究論集」一号、一九九五年三月）

谷口泰『『喬木林』覚え書」（「ソフィア」九巻三号、一九六〇年一〇月）

昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書第七十三巻』（昭和女子大学近代文化研究所、一九九七年十月）

日本近代文学館『日本近代文学大辞典』（講談社、一九七七年十一月）

『信濃追分の今昔をきく―歴史と文学―』（信州の旅社、一九八五年四月）

『堀辰雄事典』（勉誠出版、二〇〇一年十一月）

『集英社世界文学事典』（集英社、二〇〇二年二月）

『西洋史辞典』（東京創元社、一九八三年三月）

『東欧を知る事典』（平凡社、一九九三年十二月）

〈資料編〉

『深森』あらすじ

章	章題	あらすじ
1	森の城	スウェーデン軍の侵攻が迫り、男爵は娘のクラリッサとヨハナをヴィッティングハウゼン城から安全なボヘミアの森に避難させることにする。
2	森の移動	猟人グレゴールに導かれ、森の奥深くに分け入っていく。一行は湖のほとりに建つ木造の家に到着する。
3	森の家	男爵たちは城を守るため引き返していった。森の中での暮らしが始まり、2 人はグレゴールに見守られ、時には望遠鏡で城の様子を眺め静かに暮らす。
4	森の湖	穏やかなを送っていたある日、禿鷹が撃ち落とされた。グレゴールは 2 人に心配はないと言ったが、やはり不安な気持ちになり、お互いを慰めあう。
5	森の草地	禿鷹を撃ち落としたのはスウェーデンの王子、ロナルドだった。実は彼とクラリッサは恋仲であり、彼女を探してやってきたのだった。彼はプロポーズを果たすと、ヴィッティングハウゼン城を救わんと戦場へ旅立つ。
6	森の巌	ロナルドは帰らない。望遠鏡で城を見ると、そこにあったのは廃墟だった。父からの連絡を待つが、一向に便りは来なかった。
7	森の廃墟	2 人は廃墟と化した城に帰り、騎士のブルーノーから戦場で起こった悲劇を聞く。姉妹は生涯を未婚で通して亡くなり、あとに残ったのは廃墟と森だった。

『ふるさとびと』あらすじ

章	章題	あらすじ
1		牡丹屋の娘・おえふは蔦ホテルの長男に嫁ぐが、娘の初枝を産みに生家へ帰ったまま戻らず、離縁する。おえふは身なり構わず働くが、その美貌が宿泊客の間で評判になる。三村母娘と連れ立った男からは、山国にこんな女もいるのかと鋭い眼差しを向けられた。
2		初枝が転倒した際に脊椎を損傷し、以後再起できなくなる。おえふはそれでも変わりなかったが、東京から手紙が届くようになると娘の身を思い悩むようになる。しかし、初枝の具合が悪くなったのを契機におえふはすべてを諦め、娘と家を守って生きる決心をする。
3		父の死により、牡丹屋の相続問題が起こる。そんな中弟・5 郎は結婚するが、悪性のリウマチを患い立てなくなる。ただ、この病気のおかげで本家との紛糾もそのままになる。夏が去り宿泊客がいなくなると、おえふは取り残されたようなさびしさを感じる。
4		飯炊きの甥の捨吉が牡丹屋に働きに来るが、生まれつきの跛だった。彼が宿泊客による牡丹屋最後の日の予想を聞きつけ、おえふと初枝は牡丹屋の将来に不安を感じる。その年最後まで滞在した客も 9 月末に去った。山からはかすかに煙が立ちのぼっていた。